本新聞　（明治25年3月28日第3種郵便物認可）　第47117号　（日刊）

西日本新聞
2014年12月22日（月曜日）

怠け、甘えじゃない…行けない

不登校 寄り添い前へ

孤立した親も支援

不登校の子どもの数が高止まりしている。不登校は「本人の怠け癖や甘え」といった子ども自身の問題と捉えられがちだが、実際には家庭や学校など受け止める環境が変われば克服できるケースも多いという。福岡市の公立中学校で38年間教員を務め、不登校生とその家族が交流する会を4カ所で立ち上げた木村業也さん(61＝福岡市西区＝は「どの子でも不登校になり得る」と話す。不登校生にどう向き合うべきか、木村さんの活動を通して考えた。（国崎万智）

「保護者の会」元教員設立

「不登校の問題は、家庭や地域など子どもを取り巻く環境を変えなければ解決しない」。木村さんは、そう強調する。

教員になった当初は、受け持ったクラスに不登校生がいると「生活習慣の乱れを改善すれば、再び登校できるようになる」と、連日欠かさず家庭を訪問した。しかし学校に出てくるようになっても、高校進学や就職後に再び不登校や引きこもりの状態に戻ってしまう。「教員一人の力には限界がある」と感じた。

どう接すべきか悩んでいた20年ほど前、東京であったフリースクールの全国大会に参加。保護者たちの講演を聞き、不登校は当事者だけの問題ではないと気付かされた。不登校生は怠けているのではなく、「学校に行きたくても行けない」状況にあると知った。保護者が不登校の状態を受け入れることで、子の心が驚くほど安定することが分かったという。「どうして行かないのと」と叱るのではなく、「一番苦しいのは本人と、まずは寄り添うことが大事なのだ、と」。

＊　＊

それから数年後、木村さんはスクールカウンセラーたちと協力し、教頭を務めた福岡市西区の中学校内に不登校生の保護者の会を設けた。不登校生を支援するには、まず家庭に子どもの居場所をつくる必要があると考えたからだ。

福岡市中央区の女子学生(19)は、小学4年の時転校した先の学校になじめず、不登校に「ずる休み」「一日中、何もせんくせに」。家族の言葉にいらだち、周囲の人が全て敵に見えたという。

女子学生が中学2年の時、母は保護者の会に参加し始めた。周囲から親の責任を問われ、孤立していた母は一人ではないと気付く。母と娘への接し方が変わった。「学校にだけないから行かない、という気持ちを尊重してくれるようになった」と女子学生。

女子学生は子育てに悩む保護者の相談役になりたいと、保育士を目指し専門学校に通う。

木村さんは、自分が異動後も会が続くよう、拠点を地域の公民館へ移して保護者に運営を任せた。異動するたび、同様の会を立ち上げていった。月に1回の活動には毎回顔を出す。

＊　＊

大きかったのは、保護者会を通じ、子ども同士がつながりを持ったことだった。今悩んでいる子が、不登校の「先輩」をモデルに将来を描けるようになった。

「昆虫と関わる仕事をしたい」という生徒は、研究者を目指し通信制高校に進学。人とのコミュニケーションが苦手だったゲーム好きの生徒は、大手のゲーム制作会社で働く。

木村さんは「『学校に行かない』という道を選ばざるを得なかった子にも、進路の選択肢はたくさんある。その子に合った支援をすることが大事」と話す。

◇　◇

今年3月退職した木村さんは、不登校生への接し方をまとめた著書「不登校支援の輪をつなげよう～『不登校生の保護者会』を通して学んだこと～」(四六判、157ページ、税別1,200円)を出版した。問い合わせは学びリンク＝03（5226）5256。

不登校の子どもへの支援についてまとめた本を出版した木村業也さん

ワードBOX

不登校生　病気や経済的な理由を除き、心理的・社会的要因などで登校できず、年間30日以上欠席した児童生徒。文部科学省の調査によると、2013年度全国の小中学校（中等教育学校を含む）で不登校の児童生徒数は11万9617人に上り、1997年度以降、毎年10万人を超えている。文科省が2011年度に実施した調査では、不登校の主な理由は「無気力」「体調の不良や不安」「いやがらせやいじめ、友人関係」などだった。

九州密着の山歩き専門誌
季刊のぼろ
Vol.7 特集・冬のくじゅう
書店で好評発売中

もらうと本が読みたくなる。
図書カード